陶製狛犬の伝来と民俗習慣に関する報告

－「陶磁のこま犬百面相」展拾遺－

神崎 かず子

はじめに

当館で所蔵する陶製狛犬の巡回展を平成 18 年 1 月から平成 19 年 1 月まで開催した。会場は、大阪市立東洋陶磁美術館・町田市立博物館・富山市佐藤記念美術館と当館であったが、各地を巡るなかで、陶製狛犬の伝来について貴重な情報を得ることができた。また、展覧会や図録では紹介できなかったが、三河地方の調査で興味深い成果があったので、ここではこれらについてまとめ、報告することとする。

1 伝来について

展覧会の事前調査では『陶磁のこま犬』（註 1）に掲載されているものと管見のデーターをもとに、陶製狛犬の伝来状況をまとめていたが、巡回展の期間中にはさらに新しい情報を入手することができた。そこでこれらを加え、陶製狛犬の伝来状況および奉納先について、以下にまとめてみたいと思う。ちなみに、陶製の狛犬は、窯跡出土資料によって鎌倉期（13 世紀）から制作されていたと知られているが（註 2）、伝来したものは古くても室町時代（14～15 世紀）の作であり（註 3）、件数も多くない。伝来狛犬の圧倒的多数は江戸時代の作で、その中には施主や奉納先、奉納年月日や陶工名などまで記されたものが見うけられる。そこで以下では、室町・桃山時代（註 4）と江戸時代に区分し、陶製狛犬の伝来と奉納先についてまとめ、分布の傾向について考察を試みることとする。

＜室町・桃山時代の陶製狛犬＞

この時代の狛犬は報告例が少なく、瀬戸・美濃周辺地域と畿内、関東方面の神社などが知られている。展覧会では、著名な狛犬をモデルに分類し、深川神社のものを祖形とする「深川型」をはじめ、「伊勝型」（伊勝八幡宮）、「香取型」（香取神宮）、「根津型」（根津美術館所蔵：千利休伝来　瀬戸獅子香炉）と名付けて紹介した。

そこに寄せられた新たな情報は関東地方からで、東京都江戸川区にある香取神社と千葉県旭市の玉崎神社の狛犬であった。いまだ実見する機会に恵まれず郵送された写真から判断するばかりであるが、ともに伊勝八幡宮の狛犬と同類のように見うけられる。以下はこの新資料を含め、伝世する室町・桃山時代の陶製狛犬をまとめた一覧である（表 1）。

表１

名称	時代	所在地	タイプ
灰釉狛犬　吽	14～15世紀	深川神社（愛知県瀬戸市）	深川型
灰釉狛犬　一対	15世紀	尾張大国霊神社（愛知県稲沢市）	
灰釉狛犬　一対	15世紀	久麻久神社（愛知県西尾市）	
鉄釉狛犬　一対	1418年頃	伊勝八幡宮（愛知県名古屋市）	伊勝型
鉄釉狛犬　一対	15世紀	名古屋市博物館	伊勝型
鉄釉狛犬　一対	15世紀	豊蔵資料館	伊勝型
鉄釉狛犬　一対	15世紀	鹿島神宮（茨城県鹿島市）	伊勝型
鉄釉狛犬　一対	15世紀	愛知県陶磁資料館（No.493.494）	伊勝型
鉄釉狛犬　吽	15世紀	香取神社（東京都江戸川区）	伊勝型
鉄釉狛犬　吽	15世紀	玉崎神社（千葉県旭市）	伊勝型
鉄釉灰釉狛犬　吽	15世紀	玉崎神社（千葉県旭市）	伊勝型
鉄釉狛犬　一対	15世紀	玉崎神社（千葉県旭市）	伊勝型
鉄釉狛犬　吽	15世紀	個人	伊勝型
鉄釉狛犬　吽	15世紀	東京都八丈島　優婆夷神社出土	伊勝型
灰釉狛犬　一対	15世紀	香取神宮（千葉県佐原市）	香取型
鉄釉狛犬　吽	15世紀	鹿島神宮（茨城県鹿島市）	香取型
灰釉狛犬　吽	15世紀	愛知県陶磁資料館（No.1095）	香取型
灰釉狛犬　阿	15世紀	個人	香取型
鉄釉狛犬　吽	15世紀	愛知県陶磁資料館（No.499）	
灰釉狛犬　阿	15世紀	根津美術館（千利休伝来・瀬戸獅子香炉）	根津型
鉄釉狛犬　吽	15世紀	伊勝八幡宮（愛知県名古屋市）	根津型
灰釉狛犬　吽	15世紀	愛知県陶磁資料館（No.488）	根津型
灰釉狛犬　一対	15世紀	個人	根津型
鉄釉灰釉狛犬　一対	15世紀	個人	根津型
灰釉狛犬　吽	15世紀	豊蔵資料館	
鉄釉狛犬　阿	15世紀	愛知県陶磁資料館（No.490）	
鉄釉灰釉狛犬　一対	15世紀	愛知県陶磁資料館（No.491.492）	
灰釉狛犬　吽	16世紀	愛知県陶磁資料館（No.489）	
鉄釉狛犬　阿	15世紀	熊野神社（岐阜県郡上市）	
灰釉狛犬　吽	16世紀	神明神社（岐阜県郡上市）	
鉄釉狛犬　阿	16世紀	愛知県陶磁資料館（No.503）	
鉄釉狛犬　阿	16世紀	愛知県陶磁資料館（No.500）	
鉄釉狛犬　一対	15世紀	熊野神社（愛知県北設楽郡）	
鉄釉狛犬　一対	16世紀	八王子神社（岐阜県瑞浪市）	
鉄釉狛犬　一対	16世紀	久麻久神社（愛知県西尾市）	

＊愛知県陶磁資料館（No.　　）は館蔵品番号

ここにまとめた狛犬の伝世地域を俯瞰すると、尾張・美濃（深川神社・尾張大国霊神社・久麻久神社・伊勝八幡宮・熊野神社・神明神社・八王子神社）、常陸（鹿島神宮）、下総（香取神宮・玉崎神社）、江戸（優婆夷神社・香取神社）、畿内（根津美術館所蔵「千利休伝来　獅子香炉」）（註5）となる。製作地である瀬戸・美濃の周辺に数多く伝えられるのは当然であろうが、思いのほか関東地域に伝世していることや、今回発見の新資料もこの地域からの報告であったことは興味深い。後述する江戸時代の狛犬が瀬戸・美濃周辺に集中していることに比べ、室町時代の分布は東国に広がる傾向があるように見うけられる。

次に、これらの狛犬に関する事項で各社に伝えられている記録と、聞き取り調査の結果もまとめておきたい。

深川神社／灰釉狛犬　吽形（重要文化財）

陶祖藤四郎の作と長く伝えられてきた。かつては神社の社頭をかざっていたが、江戸初期（慶長年間）の火事で被災し、阿形もその時に焼失したという。また、江戸時代以降も数多くの陶製狛犬が奉納されたが、小形のものは本殿の軒下などに並べ置かれていたと伝えられている。

伊勝八幡宮／鉄釉狛犬　一対

「応永廿五戊戌歳（1418）　十二月朔日　熊野　願主浄通」の墨書銘がある狛犬一対は、昭和初期頃（大戦以前）本殿内ご神体前の帳の鎮子として置かれていた。

鹿島神宮／鉄釉狛犬　一対、鉄釉狛犬　吽形

鹿島神宮には摂社が7社ある。奥宮・沼尾神社・坂戸神社・息栖神社・高房神社・三笠神社・跡宮であるが、そのいずれかの摂社に伝来したと伝えられている。

香取神宮／灰釉狛犬　一対（重要文化財）、鉄釉狛犬　吽形

香取神宮には摂社が9社あり、その内の又見神社（産土社）に伝えられた。本殿内ご神座前の左右に置かれていたという。神宮に伝わる『宝物貴重品調書』に「摂社又見神社ニ在シモノ（昭和18年7月）」との記載があることから、その頃に香取神宮へ移動したのではないかという。

千利休伝来　瀬戸獅子香炉（根津美術館所蔵）

大きく口を開いた阿形の頭部を、口から後頭部にかけて打ち割り、香炉に仕立てたのが利休（1522～1591）であると伝えられている。箱蓋裏に「利休所持」と小堀遠州（1579～1647）が書付けており、古くから茶道具の名品として知られている。

＜江戸時代の陶製狛犬＞

江戸時代には、陶製狛犬がさかんに奉納された。これらの内、現在も神社などに伝世しているもの、胴部や台座などの銘文に奉納先が記されたものをまとめたところ、180 余件のデーターがあり、奉納先は愛知県内27ヶ所・岐阜県内44ヶ所の神社となった。その内所在地が確認できたのは下記58ヶ所の神社である（表2）。

表2

	奉納先	所在地
尾張	深川神社	瀬戸市
	八剱社	瀬戸市
	産神天王	春日井市関田町
	内々（うつつ）神社	春日井市内津町
	和爾良（かにら）神社	春日井市上条町
	八幡神社	尾張旭市井田町
	景行天皇社	愛知郡長久手町
	山田天満宮	名古屋市北区山田町
	上野天満宮	名古屋市千種区赤坂町
	伊勝八幡宮	名古屋市昭和区伊勝町
	諏訪神社	名古屋市守山区中志段味
	清水寺	犬山市善師野
	石作神社	犬山市大字今井字宮の洞
	満蔵院	犬山市犬山字東古巻

	余野神社	丹羽郡大口町余野字西浦
	鶴ヶ崎天満宮	西尾市
三河	白鳥神社	東加茂郡有間
	神明神社	東加茂郡旭町上中切字網所
	祖母神社	刈谷市東境町奥屋敷
	赤日子神社	蒲郡市神ノ郷町字森
美濃	高田神社	多治見市高田町
	諏訪大明神	多治見市根本町
	高社神社	多治見市大沢町
	神明神社	多治見市滝呂町
	神明宮	笠原町神戸
	八王子	土岐市駄知町
	八剣神社	土岐市下石町
	神明神社	土岐市妻木町
	八剣神社	土岐市下石町
	白山神社	土岐市泉中窯町
	白山神社	土岐市
	八王子	土岐市曽木町
	広見神社	可児市広見
	白山神社	瑞浪市稲津町羽広
	八幡神社	瑞浪市土岐町一日市場
	八王子神社	瑞浪市陶町大川
	貴船神社	瑞浪市日吉町深沢
	八幡神社	瑞浪市土岐町清水
	一王子・八王子神社	中津川市
	白山宮	恵那市下手向村
	天神宮	武儀郡武儀町富之保
	白山神社	武儀郡上之保村鳥屋市
	八剣神社	武儀郡上之保村
	中山神社	串原村
	白山権現	郡上郡八幡町
	石剱神社	郡上郡八幡町
	熊野神社	郡上郡八幡町
	神明神社	郡上郡八幡町井戸ノ上
	白山権現	郡上郡美並村
	荏名神社	高山市
	三枝神社	高山市
	荒神社	高山市
	日吉神社	関市
	白山神社	関市
	広福寺	関市
	新長谷寺	関市
	長徳院	美濃市

江戸時代の陶製狛犬の内、小形のものは本殿内あるいは軒下に並べ置かれていたものと、山の神・津島社などの祠前に置かれていたものがあるという。前者は銘文から地域の安全や家族の供養などを願い（註 6）、村や氏子単位あるいは個人で奉納した例（註 7）などがみうけられ、さまざまな願いを込めて奉納する絵馬に近い性格であったといわれている。後者は山中や窯の周辺、

屋敷内などに祀られた祠に置かれ、その神座を守る守護獣あるいは神使と考えられていた（写真1・註8)。また、小形の狛犬ばかりではなく、高さ40㎝内外の大形狛犬も数多く奉納されているが、これらはいずれも瀬戸・美濃の近隣地域が分布圏であることから、窯業地の特性をいかし、石造や木彫の狛犬に代わるものとしてうみだされた作られた狛犬ではなかったかと考えられる。

展覧会図録には「伝世の狛犬　分布地図」を掲載したが、これは表 1、2 のデーターを元に作成したものであった。この時点では室町時代の分布が東国におよぶことを示す程度であったが、現在はその報告例も鹿島神宮（茨城県鹿島市)、香取神宮（千葉県佐原市)、玉崎神社（千葉県旭市)、香取神社（東京都江戸川区)、優婆夷神社（東京都八丈島）の５例になり、この先さらに発見される可能性は高いと思われる。このことは当時の陶製狛犬の性格を考察する上で注目すべき点であり、室町時代の分布はなぜ東国におよぶのかについて、今後は伝来先との関連も含め、民俗学・宗教学などの助言を得たいと考えている。

２「おいぬ様」に関する民俗調査報告

館蔵の狛犬の中には、所有者であった本多静雄氏自身も告白しているが、中山神社（岐阜県恵那郡）の「おいぬ様」が含まれている（写真2、3)。「おいぬ様」とは山岳地方に見られる山犬への信仰であり、中山神社の場合は狐狸に憑かれた際に神前の「おいぬ様」を借り受けて祀れば直ちに治り、魔除けにもなると言い伝えられている。大きさは７～８㎝位、鉄釉あるいは瓦製のものが主で、口吻部が細長く、尾は長く直立し、狐と見間違えるような姿をしており、目的が達せられると２体にして神社へ返却するという。ちなみにこの神社は奈良の金峰神社の分社で、周辺の人々からは権現さんと呼ばれ、天正２年（1574）には村民による祭祀が行われたという記録がある。現在でも中山神社を訪ねると「おいぬ様」の祠があり（写真 4、5)、その信仰が村の生活に深く根付いていることがわかる。さらに山犬は神使でもあり、本殿を守るのも石造りの山犬であった（写真6、7)。

また、設楽町の奥三河郷土館と津具村民俗資料館には中山神社をはじめとする「おいぬ様」やそのお札などがあると聞き現地へ赴いたが、ここでは館内に展示・収蔵されている資料もさることながら、大きな収穫があった。加藤紘一氏（奥三河郷土館館長）と今泉宏氏（設楽町教育委員会）のご協力によって実際に民家で祀られている「おいぬ様」を拝見する幸運に恵まれたのである。

この日訪ねた設楽町津具の某家には、敷地内に「山住様」「山の神様」「中山様」が南向きに祀られているところがあり、近隣三軒でお祀りしているとのことであった。「山住様」の石祠の側面には「…天明六午年三月七日」（1786）の銘文があり、「山の神様」は真新しい２祠の中に木彫のご神像がそれぞれ１体、「中山様」には２体の「おいぬ様」が一緒に納められていた（写真 8、9)。ご当主によると、明治頃「祖父が中山様を迎えに行」き、その後お祀りしているとのことであった。この２体を祠から出して頂き拝見して驚いたことは、館蔵の鉄釉狛犬（写真 3）と全く同類であること、台座には「商木（うるぎ・売木）村　伊藤源兵衛」「新野村　伊藤伊之介」と記されていることであった。ちなみに売木村・新野村は現在長野県南部であり、三河の設楽村・豊根村とは隣接した地域である。館蔵の鉄釉狛犬（写真 3）には「和合村　与右衛門」とあり、これも売木村の北にあたる和合村であることが判明した。図録に「和合村は愛知県東郷町和合」としてしまったが、誤りであるためここにおいて訂正させていただく次第である。

もう一例も同じく津具の某家に祀られている山の神と「おいぬ様」の石祠であり、後者の祠側

面には「弘化四」(1847)「未春造立」と刻銘があった。苔むした立派な祠で、その大きさから、「おいぬ様」は高さ 15 cm内外かと推察された。手厚く祀られている様子が印象的であったが、残念ながら当家は留守でお話は伺えなかった。

その他では、中山神社と同様に祠や不動尊像などを守る一対の山犬像がみられ、それらも「おいぬ様」とよばれていた。

このように、山間の村々では生活の守り神として山犬が祀られているが、それでは山犬とは何かというと、日本狼あるいは野生化した犬であるという。狼研究の第一人者である平岩氏は狼の形態的特徴を深く観察されたが（註 9)、その要点をまとめると、日本狼の大きさは中型犬程度、前肢はほぼ胸の真下にあり（狼肩という)、足跡は細長く、頭は頭頂部から吻部まで直線に近く、尾は下に垂らしている、とのことである。これを念頭に「おいぬ様」を見ると、狐のように見える姿も実は日本狼であったことが理解できる。

さらに、平岩氏は狼に関する伝説や史実を検討される一方で、ご自身が狼と生活を共にされ、その気質を深く観察された（註 9)。それによると、現在日本狼は絶滅したと考えられているのであるが、「風土記」が編纂された奈良時代よりも以前から（註 10)、狼害報告が残されている江戸時代まで、かつてはほぼ全国各地に生息していた動物であり、神話や伝説、各種の記録にもたびたび登場する。神秘的で強く恐ろしいといった側面と、田畑を荒らす猪・鹿を退治する益獣とも考えられ、どの時代も村人の生活圏内で一目置かれる存在であった。ここではそれらを具体的に紹介する紙面がないが、山の動物を威圧する存在感と俊敏な運動能力は圧倒的で、警戒心が強く人に慣れることはまれである、など興味深い指摘が多く、こうしたことからも「おいぬ様」が神の使いをつとめる理由が見出されるように思われるのである。

ここで再び陶製狛犬を顧みると、中には「おいぬ様」すなわち日本狼に近い体つきをした作例があることに気付く。本多氏もすでに指摘されている「香取型」「伊勝型」の狛犬である。「香取型」は体が細くしなやかで額が狭く、口吻部が細長く鼻梁が額から直線的、「伊勝型」もほぼ同様であるが、額から鼻梁にかけて段がある。これらは一般的イメージの狛犬、すなわち神社の参道にある獅子・狛犬の一対とは別系統の日本狼をモデルとしたものではないか。そして、その性格も神使であるとは考えられないであろうか、というのが現在の仮説である。ただし現段階では伝世する点数が少なく、伝来先も慶応４年（1868）の神仏分離令の発布以降、所在が移動している場合が多いため（註 11)、さらに資料を積み重ねていく必要がある。今しばらくは情報を収集していくべきであろう。

まとめ

当館には本多静雄氏よりご寄贈いただいた 200 体をはじめ、それ以降も多くの方々からのご協力を得て、現在 228 点の陶製狛犬が収集されている。これらはほとんどが瀬戸・美濃で制作された当地独自の狛犬であることから、郷土の文化財として長年展示紹介してきたものである。それがこのたび巡回展の機会をいただき、東海地方をはなれて新しい情報を得ることができたのは、想定外の成果であった。数少ない室町・桃山時代の狛犬が東国で発見されたことの意味は大きく、今度の興味深い研究課題となるであろう思われる。

また、これまで当地の狛犬については、凛々しくもユーモラスで迫力ある面構えを魅力とし、いわゆる神社の参道にある典型的狛犬の規範を無視した“独自の狛犬” を強調してきた。しかしこのモデルとして当時の人々の生活圏内にあった動物（日本狼）を連想することができるなら、

造形物としても別の視点で理解し、生活感覚も追体験できるのでないかと考えられた。

このように、郷土の文化財が各地を巡る中で新たな発見があったこと、当時の生活習慣に近い風習に触れることによって理解が深められたことはいずれも大きな成果であった。これをさらに深化させるべく、次の戌年に向けて新たな切り口での巡回展を企画できればと考えている。

最後に、博物館や神社をはじめとする多くの関係者の方々に多大なご協力をいただいたことを記し、お礼とさせていただきます。

註

（註 1）　本多静雄『陶磁のこま犬』1976 年

（註 2）　洞山窯跡（瀬戸市東町）出土陶片などがある。

（註 3）　深川神社に伝わる「灰釉狛犬　吽形」。重要文化財に指定されている。

（註 4）　この時代の狛犬は伝来点数が少ないため、室町時代に連続するものとして桃山時代をまとめることとした。

（註 5）　千利休所持と伝えられる瀬戸獅子香炉は、彼の屋敷が堺と京都に在ったことから、近畿地区の伝来と推察した。

（註 6）　館蔵品にも灰釉狛犬（№556）「弘化三丙午年　仲夏吉祥　奉納□□中安全」、鉄釉狛犬　一対（№557.558）「奉納　森本市兵衛母　森本市兵衛姉」などの銘がある。

（註 7）　岐阜県郡上市の熊野神社に伝来する白釉狛犬に「那間屋村惣守子」、灰釉狛犬に「小那比村惣氏子」の銘がある。

（註 8）　荒川豊蔵が自身の窯付近に山の神を祀り、その脇に所蔵の陶製狛犬を配置して描いた絵である。

（註 9）　平岩米吉『狼－その生態と歴史－』1981 年

（註 10）　日本狼に関する最古の記録は「古風土記逸文」で、「風土記」編纂が開始された和銅 6 年（713）以前のものと考えられている。

（註 11）　前述の香取神宮、鹿島神宮の場合も同様。

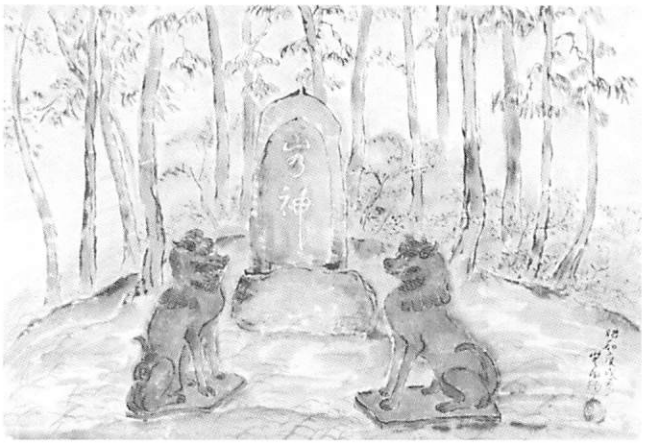

写真１　荒川豊蔵「狛犬之図」　昭和 33 年（1958）

写真２　瓦製狛犬　（No. 687）

写真３　鉄釉狛犬「和合村　与右衛門」銘
（No. 599）

写真４　中山神社「おいぬ様」（１）

写真５　中山神社「おいぬ様」（２）

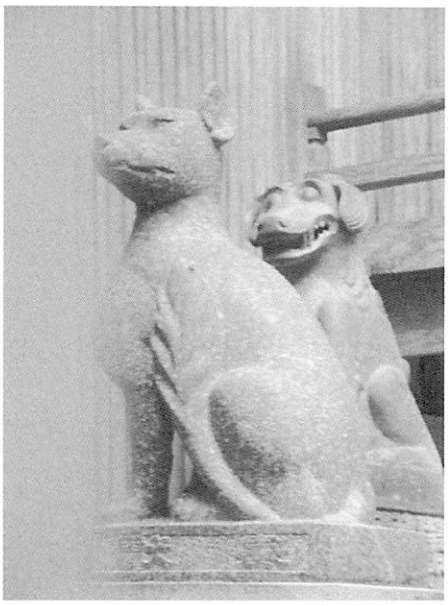

写真６　中山神社　本殿脇の狛犬（１）

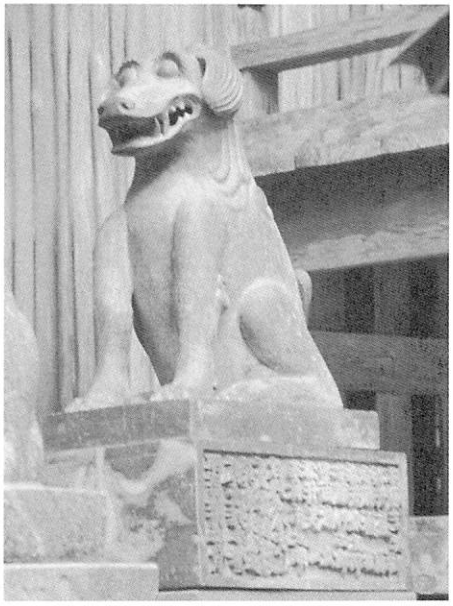

写真７　中山神社　本殿脇の狛犬（２）

写真８　設楽町津具の「中山様」祠

写真９　「おいぬ様」同左